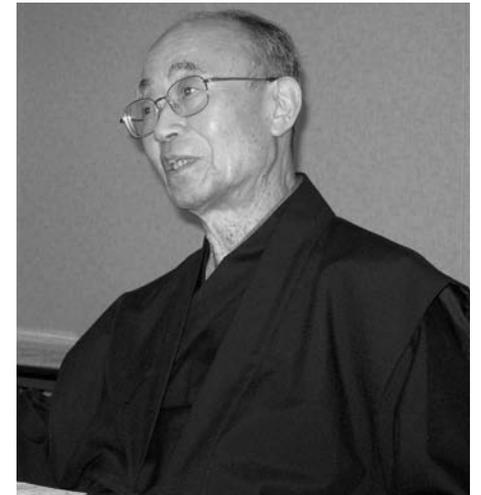


# 大震災——いま何を思えばいいのか

## 特別対談

# 「反欲望」の時代を拓けるか!?



山折哲雄  
(宗教学者)

●やまおり・つつお 一九三二年生まれ。岩手県出身。東北大学院博士課程修了。国立歴史民俗博物館教授、白鳳女子短大校長、京都造形芸術大大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。著書に『日本人と「死の準備」』『わたくしが死について語るなら』『絆 いま生きるあなたへ』などがある。

●あかさか・のりお 一九五三年東京生まれ。東大文学部卒。東北芸術工科大教授、同大東北文化研究センター所長を経て今春から学習院大教授。東北学を提唱し、雑誌創刊など多彩な活動を展開。福島県立博物館館長も。著書に『異人論序説』『岡本太郎の見た日本』『増補版 遠野／物語考』など。



赤坂憲雄  
(民俗学者・東日本大震災復興構想会議委員)

二万余の人命を奪い、国土に未曾有の災害をもたらした大震災。まだ収まらぬ原発事故とも相俟って、日本の文明や社会のあり方、人の生き方は、根底からの見直しが迫られている。犠牲となった人々の鎮魂のためにも、未来を生きる日本人のためにも、より深く、より広い、根元的な思念と議論が必要ではないのか。いま、最も話を聞きたい二人に話し合ってもらった。

### 「現代の地獄」に立ちつ

赤坂 山折さん、被災地に行かれたんですね。いかがでしたか。

山折 四月十七日から十九日にかけて、二泊三日の慌ただしい旅でした。山形空港に降りて宮城県に入り、仙台市、東松島市、石巻市、それから登米市のあたりから三陸に抜けて気仙沼市と回って、帰りは岩手県の一関市を経由して帰ってきました。

一面の破壊と瓦礫の跡を見ての第一印象は、ここは地獄だ、という実感です。幻想を伴った中世的な地獄ではなく、現代的なりアリティを持つ地獄が眼前に存

在していた。賽の河原とはこのような世界だろうと実感しました。

けれども、その地獄的景観にあって、仏の影が差していない。賽の河原の広がり、地蔵菩薩の気配がまったく感じられない。これはやっぱりすごかった。文明社会が大災害によって完璧に破壊され、宗教的な幻想すら存在しない。たとえば、気仙沼の破壊。船舶や工場、住宅や市場などの人工構造物、文明的建築物がめちゃめちゃに破壊されて、その残骸が横たわっている。この現代の悲劇を目の当たりにして立ちすくんでしまったというのが正直なところです。

石巻では土葬の仮埋葬場に胸を衝かれた。だいたい一千体くらいの遺体を葬るための墓穴をグラウンドに掘り上げていて、実際に埋葬されていたのはそのうち五分の一ぐらいかな。身元がわかっている人とわからない人が共に眠っている。わかっている人のお墓の前には花が活けられたり、線香や水が供えられていました。一組の若い夫婦らしき人がじっとたたずんで拜んでおられました。火葬にできないからさしあたり土葬にしている。仮埋葬ですね。いずれときが来れば掘り返して火葬にするでしょう。しかし、いつそのときが来るのか。埋められた人すべてが火葬される機会を